

国

語

(
解答
番号

1

5

38

(

第1問

次の文章は、高岡文章^{たかおかふみあき}「観光は『見る』ことである／ない——『観光のまなざし』をめぐる」の一部で、ジョン・アーリをはじめとする研究者の見解をふまえて書かれたものである。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。(配点 45)

アーリは「文化的なメガネ」という卓抜な表現をもちいて、見ることの社会性を明るみにだしている。まなざしの枠組は規範や様式といった社会／文化的な制度によって規定されているのであって、決して個人が自由に個性的に対象をまなざしている訳ではない。鈴木涼太郎によれば、ベトナムを訪れる日本人が観光みやげとして好むのは「ベトナムの伝統文化」を表象する手作りザツ^(ア)力であるのに対し、欧米からの観光客は「東洋文化」を表象する美術品としての大型の壺を求めるといふ。ここでは観光者が所属する社会によって、訪問地へのまなざしが異なっているのだ。

山口誠はグアムを訪れる日本人観光客の多くが楽園やリゾートといったグアムの記号にあふれたタモン湾から一步も出ず、その周囲にひろがる多様な現実への想像力から目を背けていると指摘する。人はフレームをとおしてものを見る。何かを「見る」とは、他の何かを「見ない」ことでもある。まなざしには常に選別がともなっている。

まなざしの線引きをおこなっているのはゲストだけではない。橋本和也は観光者が期待する(押しつける)イメージに適合的な役割を観光地住民が再演することは、観光という荒波から自らの生活文化を守るためのホスト側の「戦略」でもあるという。

「利^(注1)那的」であると同時に(であるがゆえに)対象に魅力を感じるという観光のまなざしの暴力性はとどまるところがない。一九世紀から二〇世紀にかけて世界各地でおこなわれた万国博覧会では、植民地住民の「展示」がおこなわれた。^(注2)悪名高い「人間動物園」である。見る主体(多くは西洋の男性)と見られる客体(多くは非西洋の女性)のあいだには乗り越えがたい線が引かれていて、まなざしは境界線の恣意性を見えづらくし、その権力性を再生産する役割を果たす。

近代以前の刑罰は多くの場合、見せしめのためにおこなわれ、それは格好の「見世物」であった。現代でも^(注3)ダークツーリズムと名を変えて、おぞましいものへの欲望が観光(の一部)を支えている。それゆえ^A観光地住民の「戦略」は常に綱渡りである。ア

アメリカの社会学者ディーン・マキャーネルが『ザ・ツーリスト』で指摘したように、観光者は「演出」に飽き足らずその「舞台裏」を見たがるのだから。ありのままを見せる生活観光は、出口の見えない隘路(注4)でもあるだろう。ここでは観光のまなざしが全域化していく。

B 観光において「見る」ことは問題含みであるだけでなく、とくに「する」こととの対比において、価値のないものとみなされてもきた。

見る主体と見られる客体という、乗り越えがたい（ようにみえた）関係性は、意外な形で反転する。観光者がまなざすのは、たいてい（自分以外の）人びとの生活実践やその痕跡である。偉大な芸術、壮大な遺跡、珍しい風習、初めて出会う食文化などなど。観光の場面において彼らは「見るだけ」のよそ者だ。ここでは見られる側、つまり生活「する」側が主役であり、それを「見る」側は観客にすぎない。文化人類学や地域社会学、環境社会学による地域研究／観光研究は、生活者の視点にウエイトを置く。その土地に暮らし働く人びとこそが当事者なのであり、彼らの生活や文化を覗く(のぞ)ために訪れて、そそくさと立ち去っていく観光者たちは招かれざる客として位置づけられてきた。

観光のまなざしにおける消費主義や薄っぺらさを鋭く批判したのはブーアスティンだった。一九世紀のなかばに旅行が変容したと彼は述べる。かつての旅人（トラベラー）が没落したかわりに観光客（ツーリスト）が台頭した。それは、旅行が「自分のからだを動かすスポーツから、見るスポーツへと変化した」ことを意味していた。「する」から「見る」への転換。旅は能動的で命がけの行為から、購入するだけのお気楽な商品へと、「無意味」で「空虚」なものへと成りさがったと彼は考えたのだった。

ブーアスティンの嘆きを時代錯誤と笑うことはたやすい。彼の観光論は、あたかも理想的で「ほんとうの」旅がどこかに存在するかのような幻想にさいなまれているというのが、後続の観光研究におけるお定まりの批判なのであるが、**C** ことはそれほど単純でもない。

表層的な観光のありかたへの飽き足らなさや批判は、現実には観光の形を大きく変えてきた。従来の大衆観光が観光地社会への無理解や無関心といった特徴を帯びていたのに対して、二〇〇〇年以降、新しい観光／オルタナティブ・ツーリズムが提唱され

実践されてきたのだ。キーワードは「体験」「交流」「学習」である。地元住民の案内によって現地を歩きながら「ほんもの」の歴史や文化を学んだり、農村や漁村の民家に宿泊して「その土地ならではの」生活を体験したりするような、活動的なプログラムが提供されている。「見る」観光から「する」観光への転換は、個人旅行のみならず、こんにちでは修学旅行をはじめとする団体旅行においてすら主要なメニューとなりつつある。^(注5)冒頭に述べた京都祇園^{ぎおん}の着物観光は、このような動向の延長線上においてこそ、よりよく理解することができるだろう。

近年、観光現象だけでなく観光研究の視座までもが更新を迫られるようになった。研究対象としての観光が「見る」から「する」へと変化しただけではない。そもそも観光は、はたしてほんとうに「見る」ことだったのかという根本的な問いが突きつけられている。たとえばアルン・サルダンハはアーリのまなざし論を批判して、「観光者は、泳がないのか、山へ登らないのか、サン^(イ)サクしないのか、スキーをしないのか」との疑問を^(ウ)ティした。

観光研究は、アーリのまなざし論を乗り越えるべく理論的な発展を試みってきた。観光における身体性やふるまいを重視する視点を「パフォーマンス的転回」と呼ぶ。視覚のみならず嗅覚や聴覚、触覚、味覚など多様な感覚との連関において観光をとらえたり、観光者の身体性やしぐさ、パフォーマンスに分析の力点を傾けたりするような研究が積み重ねられてきた。アーリ自身もヨナス・ラースンの助力をえて改訂した『観光のまなざし』第三版にパフォーマンスをめぐる章を設け、観光研究におけるパフォーマンス概念の重要性に注意を促すにいたっている。

観光はもはや「見る」ことだけで説明できるほど素朴な行為ではない。とはいえ、アーリとラースンは、視覚でどこまで説明できるかといえば「それには限界がある」と認めつつも、「視覚が観光体験の中心にある」と食いつがる。彼らにしたがえば「見る」か「する」かの二者択一は不毛なのであって、まなざしとパフォーマンスは^D「ともに踊る」関係なのだ。観光のまなざし論はパフォーマンス的転回によって^(エ)ソウされたのではなく、それを取り込みつつ生き長らえる。

かつて、人類学者たちは調査地に観光客が訪れることを毛嫌いしてきた。「文明に毒されていない」「未踏の」伝統文化こそを欲望するまなざしは、下世話な観光客たちを巧妙に排除してきたのだ。「観光者を見ない技術」は私たちにも心当たりがあるだろう。

う。海外で出会う日本人観光客をあえて見ないふりをしたり、「誰もない風景」をカメラにおさめるために観光客が通り過ぎるのを待ち続けたりといった経験をしたことはないだろうか。ここでは、アーヴィング・ゴフマンのいう「儀礼的無関心」が駆使されていて、互いが互いの観光を邪魔しないような高度なコミュニケーションが交わされている。

他方、「観光者を見る技術」も巧みにもちいられている。アーリは、山の頂上や森の奥など、他の観光者がいないことがその場所の観光的価値を高めるような状況を「ロマン主義的まなざし」と呼び、それに対して、他の観光者も同じ場所に来ているという事実がその場所の観光的価値を高める状況を「集合的まなざし」と呼んだ。後者においては、他者の存在が愉快さ、祝祭的気分、活況を与える。

他者を排除するまなざしにしても、それを取り込むまなざしにしても、ここでは他者の身体性が問題となっている。吉見俊哉は『都市のドラマトルギー』のなかで、都市を歩く人の身体性にいち早く言及していた。一九七三年にパルコが渋谷・公園通り(注6)に開店した際のキャッチコピーは「すれ違う人が美しい」であった。パルコは渋谷という都市を舞台、そこを歩く人びとを主役と見立てて都市空間を演出した。渋谷を訪れる若者たちがまなざしたのは、資本が演出する記号のみならず、それらと「ともに踊る」身体なのであった。吉見によれば、都市は「見ること」と「見られること」を媒介する役割」を果たしていた。

ゲストは他のゲストからだけでなくホストからも「見られ」ている。ダリヤ・マオズは観光者が地元住民をまなざすとともに地元住民も観光者をまなざすのだと述べて、それを「相互のまなざし」と名づけた。こんにち、京都でバルセロナでヴェネツィア(注7)で、オーバーツーリズムの張本人として観光者は冷たい視線を浴びせられている。新型コロナウイルス感染症の流行は、観光者をこの世界で最も「イマわしい存在」とみなした。

F 観光における「見る／見られる」を考えるうえで、サファリパークは示唆的である。動物のリアルな生態に肉迫するべく、人びとは車に乗り込んで特等席を確保する。動物たちは車に群がり、物欲しげに人間をまなざす。人間はふたたび動物園の檻おろに閉じ込められて、まなざしの対象となる。かつての万国博覧会とは違って、彼らを見ているのはもはや人間ではない。

(注)

1 「利那的」であると同時に(であるがゆえに)対象に魅力を感じるといふ観光のまなざし——本文より前のところで、歴史学者のヴォルフガング・シヴェルプシュが、鉄道が人間にもたらした知覚のあり方について「対象をその利那的性格のゆえに、逆に魅力あるものと見なす知覚」と指摘したことが紹介されており、こうした知覚のあり方が観光のまなざしにも見られることが述べられている。

2 万国博覧会——複数の国々が一つの場所に集い、自国の技術や生産品を展示する催し。

3 ダークツーリズム——戦跡など、人びとを襲った不幸や悲劇にまつわる場所を観光地として訪れること。

4 隘路——狭くて通りにくい通路。

5 冒頭に述べた京都祇園の着物観光——本文を含む論考全体の冒頭で、観光客がレンタル着物に身を包み、祇園を歩く様子が紹介されている。

6 パルコ——東京都渋谷区にある複合商業ビル。若者文化を発信する拠点とされた。

7 オーバーツーリズム——観光客の著しい増加によって、住民の生活や自然環境が脅かされること。

問 1 傍線部(ア)と(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①と④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

1 ザツカ
④ ③ ② ①
米の力カクが変動する
機械を力ドウさせる
ガイカを獲得する
他人に責任をテンカする

(イ)

2 サンサク
④ ③ ② ①
葡萄^{ぶどう}をアツサクする
サクボウをめぐらす
文章をテンサクする
解決の道をモサクする

(ウ)

3 テイした
④ ③ ② ①
オンテイを合わせる
記念品をゾウテイする
セケンテイが悪い
ゼンテイ条件を確認する

(エ)

4 イッソウ
④ ③ ② ①
店内のカイソウ工事を行う
ソウゴンな建物
事件のソウサに協力する
床をソウジする

(オ)

5 イまわしい
④ ③ ② ①
古くからのキンキを犯す
キキ迫る演技
キグの念を抱く
大会をキケンする

問2 傍線部A「観光地住民の『戦略』は常に綱渡りである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 観光者の持つイメージを受け入れることで自らの文化を維持しようとする観光地住民の「戦略」は、観光者のまなざしが観光者の所属する社会の制度に規定されているために、他者の文化の受容を強いられかねないということ。
- ② 何をどこまで見たり見なかったりするかという観光者の選別に対応していく観光地住民の「戦略」は、観光者の恣意によつて観光の対象が変わるために、そのまなざしにもてあそばれる事態を招きかねないということ。
- ③ ありのままの現実を見たがる観光者に寄り添おうとする観光地住民の「戦略」は、おぞましい部分を好んで観光の対象とする観光者のまなざしのために、観光地住民が自らの手でその生活をゆがめてしまいかねないということ。
- ④ 自らの生活文化を守るために観光者の期待にこたえて演技をする観光地住民の「戦略」は、演出の裏側をも見ようとする観光者の欲望のために、観光者が期待するものを際限なく生活のなかで見せていくことになりかねないということ。

問3

傍線部B「観光において『見る』ことは問題含みであるだけでなく、とくに『することの対比において、価値のないものとみなされてもきた。』とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 7。

- ① 観光研究が土地に暮らす人々の生活を覗くただけに観光地を訪れる観光者を批判し、また、ブーアスティンが旅に命をかけてきた旅人に意味を見出したこと^{みいだ}によって、「見る」主体の位置づけに変化が生じたということ。
- ② 観光で重視すべきは観光地住民の生活を体験することであり、旅行は本来「する」ものであるということが、観光研究やブーアスティンによって指摘されたことで、観光における「見る」ことの役割が後退したということ。
- ③ その土地に暮らす当事者の視点を重視した観光研究によって観光者はよそ者として位置づけられ、能動的な旅を充実したもの^{もの}と捉えるブーアスティンによって「見る」だけの観光が軽薄なものと考えられたということ。
- ④ 自らの生活や文化に価値を認める生活者の視点を重視する観光研究と、「する」から「見る」への旅行の変容を嘆くブーアスティンの見解が重なることで、「見る」側の観光者が無意味な存在^{おとし}に貶められたということ。

問4 傍線部C「ことはそれほど単純でもない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の

うちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 表層的な観光への不満や批判が、その土地の生活を体験するプログラムを人気の観光商品に押し上げることにつながり、さらにこうした変化をふまえることで、多様な感覚との連関において観光を捉える観光研究の方法が構想されることになったから。
- ② 表層的な観光への不満や批判が、観光地の生活を覗くだけの観光から観光地社会の実際を体験しようとする観光への転換を促し、さらにこうした変化と並行して、観光者のふるまいに注意を向けるようなかたちで観光研究の着眼点が改められていったから。
- ③ 表層的な観光への不満や批判が、かつての旅人による能動的な旅を再現する観光を要求することにつながり、さらにこうした変化に呼応して、観光は「見る」ことだけで説明できる行為ではないという新たな認識を観光研究にもたらすことになったから。
- ④ 表層的な観光への不満や批判が、観光地社会に対する無理解さを反省した新しい観光を実践することにつながり、さらにこうした変化を受けて、観光地に対して観光者が正しくまなざしを向ける方法を探求するような観光研究の創出につながったから。

問5 傍線部D『ともに踊る』はアーリとラースンの『観光のまなざし』第三版からの引用表現であり、筆者は傍線部E『ともに踊る』でその表現を再度用いている。これらの表現の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

解答番号は

9

。

① 傍線部Dでは観光研究においてまなざしとパフォーマンスが重要な視点であることを表し、傍線部Eでは都市の研究において商業施設と若者の身体が都市という舞台を考えるうえでともに重要な対象であることを表している。このように「ともに踊る」という表現は、複数の視点を組み合わせることにより新しい研究が可能になることを示している。

② 傍線部Dでは観光におけるまなざしが観光者の身体と関わって成り立っていることを表し、傍線部Eでは都市を彩るイメージと人々の身体がともに都市という舞台を形作っていることを表している。このように「ともに踊る」という表現は、「見る」人が見るだけではなく、行為する存在でありかつ他者のまなざしの対象でもあることを示している。

③ 傍線部Dでは他の観光者とともにあることが観光地の価値を高めるといふ観光のあり方を表し、傍線部Eでは都市を歩く人とそれにまなざしを向ける若者の存在とが都市の魅力を高めている様子を表している。このように「ともに踊る」という表現は、他者の身体とそれを「見る」人がともに観光地や都市の価値を高めていることを示している。

④ 傍線部Dでは「見る」人と「する」人とが互いに高度なやり取りを行っている観光体験のありようを表し、傍線部Eでは「見る」人と「見られる」人とがともに行き交う都市空間のありようを表している。このように「ともに踊る」という表現は、ふるまいとまなざしとの区別や主役と観客との区別が分かちがたいものであることを示している。

問6

傍線部F「観光における『見る／見られる』を考えるうえで、サファリパークは示唆的である。」とあるが、文章中に示された「見る／見られる」の事例との関係において、サファリパークはどのような意味で「示唆的」であると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① グラムなどのリゾートでは、ゲスト側の「文化的なメガネ」を通したまなざしがホスト側に押しつけられる。一方でサファリパークでは、見る主体である人間の欲望と、物欲しげに人間を眺める動物の欲望との違いが現れる。このようにサファリパークは、ゲスト側のまなざしとホスト側のまなざしとの非対称性を考えさせる点で示唆的である。
- ② 植民地住民の「展示」では、見る主体と見られる客体が恣意的に固定される。一方でサファリパークでは、見る主体である人間が動物の暮らす場に入っていくことで、動物の欲望のまなざしにさらされる客体にもなる。このようにサファリパークは、見られる側に強いられる一方的なまなざしが、見る側にも向けられる場である点で示唆的である。
- ③ 観光研究では、見られる側の観光地住民の生活が重視され、見る側の観光者はそそくさと立ち去るよそ者とみなされる。同様にサファリパークにおいても、主役はそこに暮らす動物であり、人間は観察者として通り過ぎるだけの存在である。このようにサファリパークは、見る側の観光者が「招かれざる客」であることを想起させる点で示唆的である。
- ④ 観光の現場では、観光者は他の観光者を見る存在であると同時に他の観光者から見られる存在でもある。同様にサファリパークでも、動物を見る他の客の邪魔をしないよう注意を払ったり、他の客と一緒に動物を観察しようとしたりする。このようにサファリパークは、観光者相互のコミュニケーションのあり方に注意を促す点で示唆的である。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第2問

次の文章は、蜂飼耳^{はちがひみみ}「繭の遊戯」(二〇〇五年発表)の一節である。

「ん」は、小屋に籠もって何かを作っていることが多かった。その小屋に幼いころの「わたし」はよく遊びに行っていた。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 45)

壁に、ギターが掛けられていた。触りたい。「あれ取って」。すぐには取ってもらえない。「あれ、取ってよ。ちよつとだけ」。

おじさんは、取るかどうかわざと迷うふりをしながら、金具を外しギターを下ろす。受け取り、抱えてみる。鳴らしてみる。どんなメロディーにもなりはしない。つまらないというより、不安だった。自分でばら撒いたおかしい音に、自分で不安になるのだった。「返す」「もう、いいの」。

5 なにか弾いてよ。頼むと弾いてくれる。いつも同じ曲だ。最後まで全部、聞いたことはない。いつも途中で、「あれ」と首を傾げる。「あれ、あれ」。風^{たか}が落下するときのように、見えない糸が不意に弛^{ゆる}みはじめて、ぷつんと止まる。「あれ、わからなくなった」。いつものことだが、いつも、がっかりする。Ⅰがっかり、という気もちには、かわいそうだ、と思う気もちが混ざっていた。生意気にも。五つや六つの子どもでも、そうしてこつそり、大人を哀れむときがあるのだ。

10 気まづくなり、いつも同じ質問をする。「なんていう曲」。つづきがわからないということは、どちらにもわかっていて、暗黙の了解なのに、おじさんは目を泳がせて、^A音を探すふりをする。心をこめるように爪弾く。「アルハンブラの思い出だよ」。

アルハンブラってなに、とは聞けなかった。思い出というからには、人の名前だろう。きっと女の人の名前だ。そう思いこみ、恥ずかしさに密封されて、聞けないのだった。

15 おじさんが厄介者にされているのは、仕事をしてお金を稼ぐということをしないからだだった。とはいえ、働かなくても済むような資産があるわけではない。ときどき、トラックの運転手などをして、そのときに必要な分だけ稼ぐのだった。いまでいうところのフリーターだ。快く思わない人は親戚中において、誰彼と顔を合わせるたび、叱られているようだった。ちゃんと仕事しなさい。もつとも口うるさいのは、おじさんの姉、つまり、わたしの母だった。説教がはじまれば、早く終わらないかな、とうん

ざりして、柱の陰から見ている。大人に怒られる大人は、子どものようなものだった。おじさんは大人なのに、と悔しかった。いったい、なにをしているのだろう、おじさんは。不思議だった。というのは、いつでも、忙しそうにしているからだ。自分で建てた小屋という繭に籠り、でも、眠ってはいない。じっとしてはいない。いつも、くるくると動きまわっている。器械をいじったり、なにか組み立てたり、切ったり、削ったりと。不思議だった。「なにしているの」と聞けば必ず、「仕事」という答えが返ってくる。いつもなにかを作っているようだったが、その成果が見えるかたちで現れることは滅多にないのだった。

「いつまでも親のスネかじって」。ある日、おじさんの姉、つまり、わたしの母が大声を上げて怒りはじめた。おじさんは耳が聞こえなくなった鳥のように、なにもかも無視して、母屋からずっと抜けて行った。「お母さん、なんとかいってよ」いつても、いつも「お母さんが甘いからよ」「もうわかった、あたしが死ねばいいんでしょ、じゃあ、死ぬよ」。祖母は罵りながら、豆の殻を剥いた。豆の匂いは喧嘩の匂い。いやになり、庭へ出て、小屋へと歩く。夜風がある。南天の繁みがあたまを振る。重たくざわつく。闇のなかに四角く切り取られたおじさんの窓。叩く。聞こえないのかな。重たくざわつく南天の繁み。もう少し強く叩く。

「あたしだよ」。ほそく開いた。閉じこめられた虎のように、外のようすを窺う。「おばあちゃんたち、喧嘩してるよ」。おじさんのせいだよ、とは口にしない。おじさんは、わたしがなにか企んでいないかどうか、じいっと目をほそめて観察する。わたしはその瞬間的な観察に耐える。なにもないとわかると、上げてくれた。小屋のなかは、いつもインドの匂いがした。アルハンブラがわからないと同様、インドもよくわからなかった。インドで買ってきたんだ、と見せてくれたお香の包みの上で、目ばかり大きな赤い顔、青い顔が見つめ合っている。「手がいっぱいあって怖い」「神さまだよ」「これが」「インドの」。

仏壇に立てられるものより、ずっと長くて甘やかな香りのお香をもくもくと焚き、おじさんは緑色の瓶の液体を飲んでいた。「それなに」^(注4)「シードル」「飲みたいな」「子どもの飲み物じゃないよ」「ちよつとだけ」。シードルを固まりのように飲みこんで、おじさんはため息をつく。シードルを舐めて、わたしもため息をついた。おじさんに隠して。擦り切れたカーペットの上に、さまざまな色のガラスの欠片。赤、青、黄、緑、ピンク、紫、だいたい、縞模様。そばには、作りかけのランプの笠のようなもの。

「そつだ、これ、どう思う」。ベッドの隅に腰掛けていたおじさんが、力なく立ち上がる。緊張する。意見を求められることなど、はじめてだったからだ。汚れた壁と黒い本棚の隙間から引き出されたのはステンドグラスの絵だった。ガラスはすべて嵌めこまれ、完成品のようなだった。鳥が二羽、空を渡っていくところ。「どう思う。わかるかな、鶴だけだ」。

五つや六つの子どもの目にも、その鶴にはなにか足りない、わかった。鶴というより、もつとずんぐりした鳥に見える。翼をもう少しほそく長くしたら、いいのではないか。子どもの目にも、そんな意見が浮かぶほど、なにかが欠けていた。いま思うと、つまり、切れがなかったのだ。「悪くないよね」と、おじさん。いい、といってほしいのか。それとも、子どもは思った通りを口にする期待して、本当の意見を待っているのか、わからない。そのところがわからなかった。「悪くないでしよ」。

B そのとき、わたしのなかでむくむくと目を覚ましたのは、母に似たものだった。

「あひるみたい」。おじさんの顔が内側から崩れる。「鶴つてもつと、スマートだよ」。崩れる。思いがけないほど、あつさり。それを見ると、取り返しをつかないことをした、という気もちになった。同時に満足だった。いいと思わないものを、いいとはいえない。いつてはいけない。これで嫌われるのなら、それはそれでしかたないと、にわか**に**強気になり、息を吐いた。満足と孤独。しのびこんだ蛾が、押せない窓を押して暴れ、しきりに乾いた音を立てる。そのとき、わたしはなにかを、教えられていたのだ。でも、そういう考えをひろげることはできず、なにか大事なものを自分で探り当てたつもりになり、昂揚していた。おじさんの手にこびりつく、石鹼では落とせない塗料。眠くなったふりをして、小屋を出た。

それからしばらくして、今度は陶芸の虫が、おじさんに取り憑いた。どこから土を運んで来るのか、周りが気づいたときにはもう、小屋の入口に敷いた古いビニールシートの上に、大小の器がいくつもならんでいた。「絵は、ないの」「絵は、乾かしてからだよ」。そういうことのすべて、本や雑誌を見て、やり方を覚えるのだという。「あんなに器用なんだったら、少しは活かせばいいようなものだけだ」。母がいないとき祖母はそんなふうに呟いた。でも、母がいて、母に責められるときには、決してそうはいわない。「だって、あたしが産んだんだから、どうしようもない」という。「焼き物をやるついても、なにも習わないで、そんな我流でやっているだけじゃどうしようもない、仕事になんかならない」と、母。

五つや六つの子どもにとって、大人は二種類に分かれる。遊んでくれる人と、そうでない人。おじさんは遊んでくれるばかりか、いつもなにかを熱心に作っていた。他の大人たちが心配したため息をつくほど無力だとは、思えないのだった。小屋の陰にしゃがんで蟻あひの巣を見ていると、壁を通して、削ったり切ったりする音が漏れ出てくる。おじさんは確かに、なにかしている。それだけは、わかった。

「ちよつと、ちよつと」。池のそばに座りこみ、ゲンゴロウ(注5)を探していたら、おじさんに呼ばれた。小屋の窓が開き、意に反して閉じこめられた虎のように、手招きする。ゲンゴロウは見つからない。金魚が上がってきて静かな水面へ口をつけ、波紋をひるげる。ひよつとすると、どこかへ飛んでいったかなゲンゴロウ、と思いながら答える。「いま行く」。見せたいものがあるか、用をいいつけるか、どちらかだ。

小屋を覗のぞいて、おどろいた。奇妙なかたちの白いものが、整列している。どれにも穴がずらりと開いていて、笛かな、と思う。(注6)「オカリナだよ」。乾かしているのだった。「こんなたくさん作ったの」というと、「売るんだ」。秘密の計画を打ち明けて、声をひそめた。「だけど、ちゃんと鳴るの」「鳴るよ、もちろん」。信用しないでいると、おじさんは「試作品」といって、箱のなかから、完成した水色のオカリナを取り出した。両手で持つて、口をつける。迷子の鼻ふみうのような音。塗られた水色の濃淡は、模様のようにも、ただの斑むらのようにも見える。きれいかどうかわからない布で吹き口を拭い、わたしに渡した。

吹く。鳴ることは鳴る。でも、ばらばらの音。「これ見ればわかるよ」といって、おじさんはこまかく折った紙切れを出した。(注7)運指法が載っていたが、見てもよくわからなかった。ただ鳴らしているだけでも、三つ四つの音階に、たどり着くことはできる。欲しくなった。「ちようだい」と頼むと、その願いを聞き入れるかどうか深く悩む、というふりをしながら、「じゃあ、あげよう」。それから、取り出される別の木箱。古びた木箱色のついたオカリナが、いくつも息を殺して夜明けの玉子のようにじつとしていた。「いっぱいあるから」。勝ち誇ったようにわらう。

Ⅱ すこい、と思いいながら、がっかりした。こんなふうに自分の手でオカリナを作ることができても、オカリナを作れない他の大人たちから、怒られつづけ、文句をいわれつづけるのか、と。拾った枝で池の水を掻かきまわしながら、あたまを悩ませた。

他の人たちから見れば意味が薄いことを、自分の熱意だけでつづける。どこへ繋^{つな}がつていくのか、わかりもしないまま。C 触
 角の取れた虫。方向感覚を破壊された鳥。それは、どういうことなのだろう、と。おじさんの心配をしながら、自分も晴れない
 霧につつまれた。オカリナどころか、なにも作れない自分は、どうすればいいんだろう、と。

だれもないところへ行つて、オカリナを吹く。D 曲にはならない。ただ、ばらばらの音。吹いていると、身体表面が分
 厚く剥がれ落ちる気がする。それを拾い集めるべきかどうか、わからない。捨てておいていい、殻のようなものかもしれない。
 おじさんは、たくさんのオカリナを、バザーで売るといった。運指法の説明もつけて、とそれがすごいアイデアであるか
 のように、いうのだった。

(注) 1 アルハンブラの思い出——ギターの曲名。アルハンブラはスペインにある宮殿の名前。

2 母屋——住居のなかで、生活の主な場となっている建物。

3 南天——小さな赤い実をつける低木。

4 シードル——リングの果汁を発酵させた発泡酒。

5 ゲンゴロウ——池や沼にすむ昆虫。

6 オカリナ——鳥の形を模した土製の笛。

7 運指法——楽器を演奏するときの指の運び方。

問1

傍線部A「音を探すふりをする。心をこめるように爪弾く。」とあるが、ここで「わたし」が捉えているおじさんの様子はどのようなものか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

11。

- ① 自分が途中までしか弾けないことを取り繕うために、弦を鳴らし、身を入れて曲の続きを思い出そうとしているかのように見せている。
- ② 弾き切ることこそできないが大切な曲であることを「わたし」に伝えるために、記憶をたどって、一音一音探るかのように見せている。
- ③ 曲が弾けなくて気落ちしていることを「わたし」に悟らせないために、曲を想起しつつ、追憶にひたっているかのように見せている。
- ④ 曲を弾き通せなくて体面を失った落胆を隠すために、あらためて丁寧に曲を弾こうとし、深い思い入れがあるかのように見せている。

問2

傍線部B「そのとき、わたしのなかでむくむくと目を覚ましたのは、母に似たものだ。」とあるが、このときの「わたし」に起こった心の動きの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 12。

- ① 自分の作品に不足している点がないかを気にしているおじさんが情けなくなり、あえて厳しい意見を述べておじさんに反省を迫りたいと思った。
- ② 作品の出来の良さを疑わず高い評価を期待するおじさんに違和感が芽ばえ、よい作品ではないという意見を相手を傷つけてでも伝えたいと思った。
- ③ 自分の作品に自信がない様子であるおじさんにいらだちを覚え、作品の出来ばえに対する失望感からも自分が気づいた欠点を告げようと思った。
- ④ 作品の完成度が高くないにもかかわらずよい評価を求めるおじさんに現実を突きつけない気持ちが生じ、感じたことを率直に伝えようと思った。

問3

本文22行目から27行目と51行目から56行目の二箇所には、おじさんの生き方に対する母と祖母との姿勢の違いが表れている。その違いの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

13。

- ① おじさんのしていることについて、母は生計を立てるために独学でなくきちんと技術として習得すべきと主張しているのに対し、祖母はいつかは実力を見せるだろうと期待している。
- ② おじさんのしていることについて、母は家族の負担になっているのだからやめるべきだと主張しているのに対し、祖母はそれほど大きな負担ではないからかまわないと認めている。
- ③ おじさんのしていることについて、母はその価値を認めずに仕事をして収入を得るべきだと主張しているのに対し、祖母は素質が仕事につながっていないとまったく思っている。
- ④ おじさんのしていることについて、母は祖母がもつと厳しく叱るべきだと主張しているのに対し、祖母はもうどうしようもないのでこれ以上は叱ってもしかたがないと諦めている。

問 4

波線部Ⅰ「がっかり、という気もちには、かわいそうだ、と思う気もちが混ざっていた。」、波線部Ⅱ「すごい、と思いがら、がっかりした。」とあるが、この二つの「がっかり」にはどのような違いがあるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

① 波線部Ⅰでは、取り組んでいることを達成できず子どもの期待を裏切るおじさんに同情していたが、波線部Ⅱでは、おじさんが独学で創作する能力を持つているにもかかわらず、優れた作品を生み出して人を感動させられないために家族から怒られてばかりいることをやるせなく思うようになった。

② 波線部Ⅰでは、取り組んでいることをやり通せないおじさんの意志の弱さを情けなく思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんがいろいろなものを作り出す能力があるにもかかわらず、何かに絞ってそれを完成させようとはしないために大人には受け入れてもらえないことを悔しく思うようになった。

③ 波線部Ⅰでは、取り組んでいることが向上しなくてもよいと思っているおじさんを不憫^{ふびん}に思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんが人を感じさせるものを作る資質を持つているにもかかわらず、それを母や祖母に理解させようとしないために家族から罵られ報われないことを無念に思うようになった。

④ 波線部Ⅰでは、取り組んでいることが中途半端で終わってしまうおじさんを気の毒に思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんが自分自身の手でものを作り上げることができるにもかかわらず、いまだ自活してはいないために大人からは叱責され価値を認められずにいることを残念に思うようになった。

問5

本文の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は

15。

① 「繭に籠り」(19行目)、「耳が聞こえなくなった鳥のように」(22～23行目)、「閉じこめられた虎のように」(28行目)は、いずれもおじさんが不本意な状況におかれていることを比喩で表している。

② 「叩く。聞こえないのかな。重たくざわつく南天の繁み。もう少し強く叩く。」(26～27行目)は、「わたし」がおじさんの小屋を訪れた体験をその時点に立つて臨場感をもつて表している。

③ 「そのとき、わたしはなにかを、教えられていたのだ。」(48～49行目)は、語り手「わたし」が幼少期の体験を振り返り、現在の視点からの解釈も加えて語っていることを表している。

④ 「オカリナが、いくつも息を殺して夜明けの玉子のようにじっとしていた」(73～74行目)は、オカリナを玉子になぞらえるとともに擬人法を用いて、おじさんの作品を印象的に表している。

問6

傍線部C「触角の取れた虫。方向感覚を破壊された鳥。それは、どういうことなのだろう、と。おじさんの心配をしながら、自分も晴れない霧につつまれた。」とあるが、このときの「わたし」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～

④のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 行き先が見えないままで進んでいくおじさんの生き方について問うなかで、おじさんの現状を、ひとごとではなく自分自身の生き方にも関わるものとして受け止めてとまどっている。
- ② 知覚の一部を失った生き物におじさんのあり方を重ねるなかで、おじさんの苦勞に寄り添うことも支えになることもできない自分が、おじさんのためにできることはないか悩んでいる。
- ③ 衝動に突き動かされて迷走しているおじさんの姿を見るなかで、おじさんがどこに向かっていくかわからず、それに振り回され続けることになる自分たちのことも不安に思っている。
- ④ 本当にやりたいことが見つからずにもがくおじさんの苦しさについて考えるなかで、いつも周囲の大人に否定され文句を言われ続けるおじさんの内心を測りかね、途方に暮れている。

問7

傍線部D「曲にはならない。ただ、ばらばらの音。吹いていると、身体が表面が分厚く剥がれ落ちる気がする。それを拾い集めるべきかどうか、わからない。捨てておいていい、殻のようなものかもしれない。」とあるが、「わたし」は結末部分でどのような心境になったと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 冒頭の「わたし」は、自らがギターを弾けないことに気づくとおじさんに代わりに弾くように頼んでいた。それに対して結末部分の「わたし」は、おじさんから離れて誰もいないところでオカリナを吹いており、自分を保護してくれる存在がいることの安心感を恐る恐るではあるものの手放そうとしつつある。

② 冒頭の「わたし」は、ギターを弾いたり作品を見せてくれたりして一緒に遊んでくれるおじさんの小屋のなかで充足感を得ていた。それに対して結末部分の「わたし」は、オカリナを小屋の外で吹いているように居心地のよい場所からあえて抜け出したことで、自分の道を進んでいくことの不安を実感しつつある。

③ 冒頭の「わたし」は、思うようにギターが弾けないおじさんを見て哀れむなど物事を醒めた目で見える傾向があった。それに対して結末部分の「わたし」は、ついにオカリナを作り上げたおじさんの熱心さに触れたことで、興味が持てるかどうかにかかわらずに挑戦する必要があるのではないかと迷いつつある。

④ 冒頭の「わたし」は、メロディーにならないギターの音のとりとめのなさに不安を感じてすぐに手放していた。それに対して結末部分の「わたし」は、オカリナの音がばらばらであることに気づいてもなお吹き続けており、心もとなさを覚えながらも自身の価値観が揺らぎ始めていることを自覚しつつある。

第3問

わかりやすい言葉づかいについて自分の考えを書くという課題を与えられたUさんは、かつて外来語をわかりやすく言い換える提案があったことを知って興味を持ち、そのことを例に【文章】をまとめている。【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】は、集めた資料をUさんがまとめ直したものである。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。(配点 20)

【文章】(段落に 1 ～ 4 の番号を付してある。)

1 言いたいことをわかりやすく伝えるためには、語句を言い換えたほうがよいことがある。その一例として外来語を取り上げたい。【資料Ⅰ】は、二〇〇三年当時、あまり定着していなかった外来語について、わかりやすい言い換えが提案されたときの意識調査の結果である。(X)ここでは「インフォームドコンセント」という語に注目して、言い換えの意義について考える。

2 【資料Ⅱ】は、「インフォームドコンセント」の言い換えについての提案である。「納得診療」や「説明と同意」と言い換えるのと、「インフォームドコンセント」とは、医師の十分な説明をもとに患者が納得したり同意したりして、両者が医療に臨むことを表す語句だとわかる。診療場面で重要なことであるにもかかわらず、当時、その概念は浸透していなかった。この言い換えの提案は、そうした状況のなかで、A 意義があつたと考えられる。

3 この提案から二〇年近くたった今、言い換えが必要ないほど定着した外来語もあるだろう。しかし、外来語をわかりやすく言い換える必要性が今後なくなるわけではない。それは、ある外来語がそのまま一般的になったとしても、社会の変化にあわせて別の新しい外来語が使われるようになるからだ。また、B 時代が進んでも社会全体として外来語の増加を当然だと考える人が大きく増えるとは限らない。意味の伝わりにくそうな外来語については、これからも言い換えたほうがよい場合があるのではないか。

4 今回は外来語の言い換えを例に、わかりやすい言葉づかいの重要性について考えた。今後も外来語について関心を持っていきたい。

【資料Ⅰ】外来語に関する意識の調査

調査年：2003 年 調査対象：満 15 歳以上の男女 調査有効数：3087 人

図の数字は％。四捨五入のため合計が 100 ％にならない場合がある。

これまで日本語になかった物事や考え方を表す次の語について、あなたは、言い換えしないで外来語のまま使ったほうがよいと思いますか。

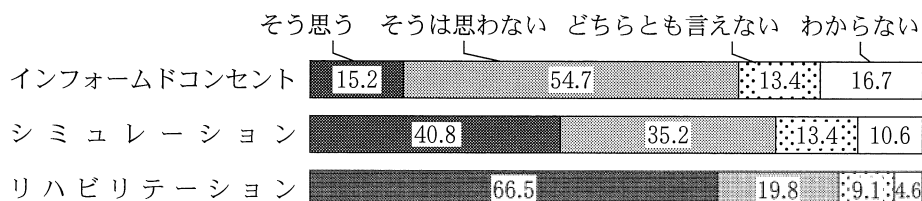


図 1 外来語のまま使ったほうがよいか

国立国語研究所の「外来語言い換え提案」では、次のような「言い換え語」を提案しています。あなたは、「言い換え語」と、もとの外来語とではどちらがわかりやすいと思いますか。

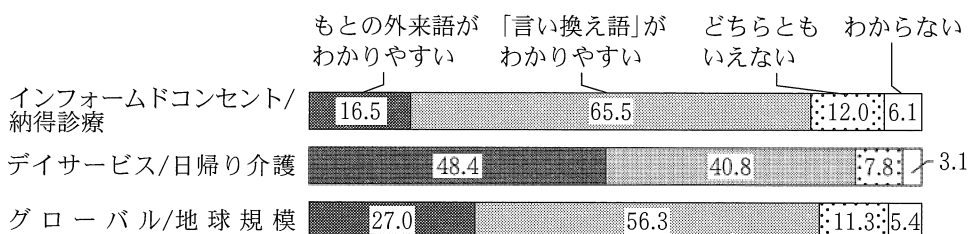


図 2 「言い換え語」のわかりやすさ

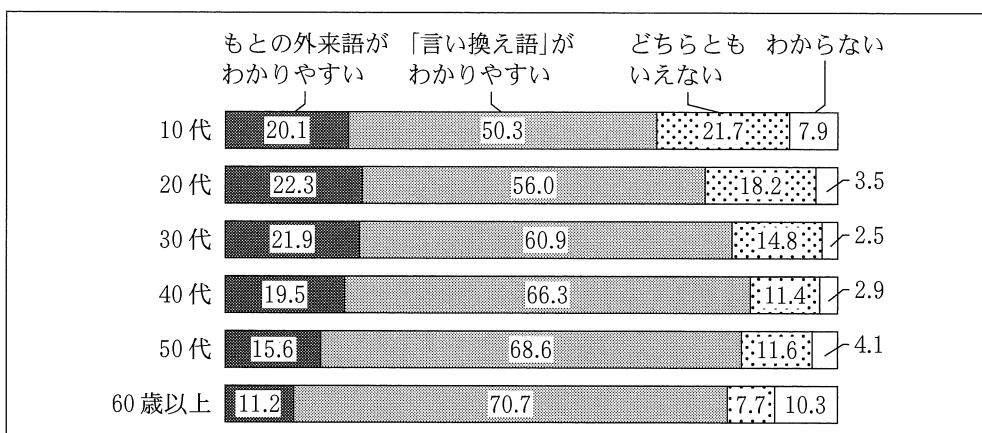


図 3 図 2 の調査のうち「インフォームドコンセント」についての年代別回答

(国立国語研究所『外来語に関する意識調査(全国調査)』をもとに作成)

【資料Ⅱ】「インフォームドコンセント」の言い換え提案(2006年)

インフォームドコンセント

【言い換え語】 納得診療 説明と同意

【用例】 納 得 診 療

この病院はインフォームドコンセントを重視し、患者中心の医療の実践をうたっている。

説 明 と 同 意

子供の移植患者に対してのインフォームドコンセントは昨春から一度でよいとされている。

【意味説明】

十分な説明を受けた上での同意

【手引き】

- ◎1980年代から日本でも使われるようになった語で、1990年に日本医師会が、日本の医療への導入と普及の必要性を指摘したことなどをきっかけに、一般に広まり始めた。
- ◎医療を中心に、現代社会における重要概念として、普及定着が望まれているが、現状では意味を理解している人は少ないので、言い換えや説明付与などの必要性は高い。
- ◎診療場面において使われることが多く、患者の納得に基づく診療行為を表したい場合は、「納得診療」という言い換えが分かりやすい。また、患者の納得という行為を前面に出すことによって、患者の視点からこの概念を見ることを促す効果も期待でき、概念の普及にも役立つと考えられる。

(国立国語研究所「外来語」委員会編『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』をもとに作成)

問1

Uさんは、「インフォームドコンセント」という語に注目する理由を明確にするため、「文章」の1段落の(X)に文を書き加えることにした。書き加える文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は18。

① 図1が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、他の語に比べて多くの人が外来語のまま使用するほうがよいとしている。

② 図1と図2が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、外来語の言い換えを肯定的に捉える人の割合が他の語より多い。

③ 図2と図3が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、「言い換え語」に対する年代ごとの意識の差が他の語より大きい。

④ 図3が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、もとの外来語のほうがわかりやすいとする割合が、年代が下がるほど高い。

問2

Uさんは、【文章】の傍線部A「意義があつた」について、どのような意義があつたのかを具体的に示すため、表現を修正することにした。修正する表現の内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

- ① 医療現場で医師の言葉が患者にわかりやすく伝わるようにするとともに、外来語を身近な日本語に言い換えるという発想を広めようとする点で意義のある試みだった
- ② 医師の責任を明確にして患者を安心させるとともに、医師の使う外来語を患者が適切に理解した場合の効果を社会に伝えようとする点で意義のある試みだった
- ③ 医師と患者の両方の立場を尊重するとともに、患者の訴えを医師が十分に理解して受け止めることの重要性を確認していくこととする点で意義のある試みだった
- ④ 医療における医師の説明や患者の納得の必要性を重視するとともに、この外来語の表している概念を社会に定着させようとする点で意義のある試みだった

問3 Uさんは、【資料Ⅲ】を用いて【文章】の3段落の主張に根拠を加え、さらに【文章】の全体を整えることにした。これを読
んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料Ⅲ】外来語に関する意識の2002年と2022年の比較

調査対象：満20歳以上の男女

調査有効数：2002年は1295人、2022年は1152人

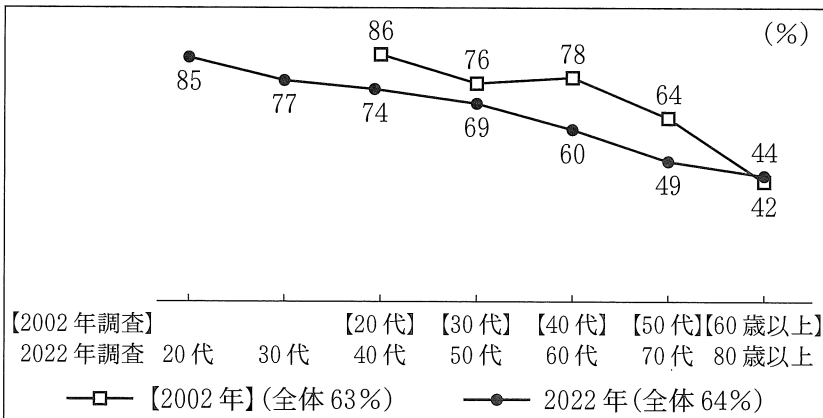


図4 「外来語が増えるのは当然だ」とする人の割合

【図についてのメモ】

- ・図では、次の二つの考え方のうちAに賛成した人の割合を示している。

A：新しい物や考え方が入ってくるから、外来語が増えるのは当然だ

B：新しい物や考え方が入ってきたら、外国語を日本語に訳して使うほうがよい

- ・図の横軸では生まれた年を基準にして同じ世代が同じ位置に示されている。例えば、【2002年調査】の【20代】と2022年調査の40代は、生まれた年を基準にすれば同じ世代なので、同じ位置に示されている。
- ・回答者全体のうちAに賛成した人の割合は、2002年と2022年でそれぞれ63%、64%である。

(NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』2022年12月号をもとに作成)

- (i) Uさんは、【文章】の 3 段落の傍線部B「時代が進んでも社会全体として外来語の増加を当然だと考える人が大きく増えるとは限らない」という主張の根拠を明確にするため、【資料Ⅲ】を用いようと考えた。【資料Ⅲ】から読み取れる根拠として適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 二〇〇二年と二〇二二年の六〇代以上を除く各年代について、同じ年代どうしを比較すると、外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合に大きな変化が見られないこと。
- ② 二〇〇二年と二〇二二年のどちらの調査においても、回答者全体のうち外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合は六割程度しかなく、著しい差はないということ。
- ③ 二〇〇二年の調査と比較すると、二〇二二年の調査では、生まれた年を基準にした同じ世代において、外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合が低い場合が多いこと。
- ④ 二〇〇二年の六〇歳以上と比較すると、二〇二二年の六〇代、七〇代、八〇歳以上の各年代では、外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合が低くなっているということ。

(ii) さらにUさんは「文章」全体を読み直し、加筆・修正したいと思ったことを書き留めた。加筆の方針として最も適当なものを次の①、③のうちから一つ、修正の方針として最も適当なものを次の④、⑥のうちから一つ、それぞれ選べ。加筆の方針についての解答番号は 21、修正の方針についての解答番号は 22。

① かつて言い換えを求められた外来語がその後ただけ定着したかを示すため、【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】をもとに、言い換え語に対する人々の意識の変化について説明する文章を 1 段落に加筆する。

② 言い換えの提案がどのような形で実践されようとしていたかを示すため、【資料Ⅱ】をもとに、用例を挙げたり手引きを加えたりという工夫があったことを説明する文章を 2 段落に加筆する。

③ 外来語の言い換えが現在ではより一層重要になっていることを示すため、【資料Ⅲ】をもとに、外来語を頻繁に使う人が増加していく傾向にあるということを説明する文章を 3 段落に加筆する。

④ 与えられた課題に対しての結論を述べる必要があるので、4 段落の末尾の文を「一つ一つの外来語の意味を適切に理解していくことが重要である。」と修正する。

⑤ 与えられた課題に対しての結論を述べる必要があるので、4 段落の末尾の文を「伝える相手や目的に応じて語句を使い分けていくことが重要である。」と修正する。

⑥ 与えられた課題に対しての結論を述べる必要があるので、4 段落の末尾の文を「医師の使う用語の概念が患者に伝わるかに注目することが重要である。」と修正する。

第4問

次の文章は、いずれも物語の一節で、『文章Ⅰ』は『在明の別』^{ありあけ わかれ}、『文章Ⅱ』は『源氏物語』若菜下の巻である。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。(配点 45)

【文章Ⅰ】

右大臣の娘である大君は、夫である左大臣の子を妊娠している。一方、右大臣の妹である女君は、かつて契りを交わした左大臣との関係が途絶え、苦悩を深めていた。そのころ、大君が病になり命が危うくなったため、僧が呼ばれて祈禱^{きとう}をすることになった。

山の座主^(注1)、慌て参りたまへり。御枕上に呼び入れきこえて、右の大臣、御手をすりて、仏にもの申すやうに、「ただ、いまひ

とたび、目を見合はせたまへ。あまはべる中に、何の契りにか、^(ア)いはけなくよりたぐひなく思ひそめはべりにし闇を、さ

らに晴るけはべらぬ」と、泣きまどひたまふに、いと静かに数珠押し揉^もみたまひて、^(注4)「令百由旬内、無諸衰患」と読み **a** たま

へる御声、はるかに澄みのぼる心地するに、変はりゆく御けしき、いささか直りて、目をわづかに見開けたまへり。あるかぎ

り、^(イ)なかなか手まどひをして、^(注5)「誦経よ、何よ」とまどひたまふに、なほ心ある人とも見えず、御かたちも変はりたるやうに

て、その人とも見えたまはず。いとにほひやかにけ近きものから、妬^{ねた}げなるまみのけしき、左の大臣はさやうにも分きたまはず、父殿ぞ、いとあやしう、「思ひかけぬ人にも似たまへるかな」と心得ず思^{おも}さるるに、うちみじろきて、

さまさまに朝夕がす胸のうちをいづれのかたにしはし晴るけむ

とのたまふけはひ、いささかその人にもあらず、違^{たが}ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、かへすがへす「あやし」と傾^{かたむ}かれたまふ。

さて、わが御心おはせねば、また消え入りつつ、さらにとまるべくもおはせぬを、「今はけしう **b** おはせじ」とおし静めつ

つ、いたく噎^かれたる御声やめて、薬師^(注6)の呪^ずをかへすがへす読みたまふに、御もののけ現れ出^いでて、小さき童^{わらは}に駆^(注7)り移されぬ。

^(ウ)呼^よびひののしる声に、今ぞ御心出で来るにや、人々のまもり **c** きこゆるを、「はしたなし」と思^{おも}して御衣を引きふたぎたまふ。

(注) 1 山の座主——比叡山延暦寺の最高位にある僧。

2 闇——子を思うあまりに分別を失う親心のたとえ。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰和歌集』)による。

3 晴るけ——下二段活用動詞「晴るく」の連用形。

4 令百由旬内、無諸衰患——『法華經』の一節。周囲から衰えや患いをなくすという内容。

5 手まどひ——慌てふためく様子。

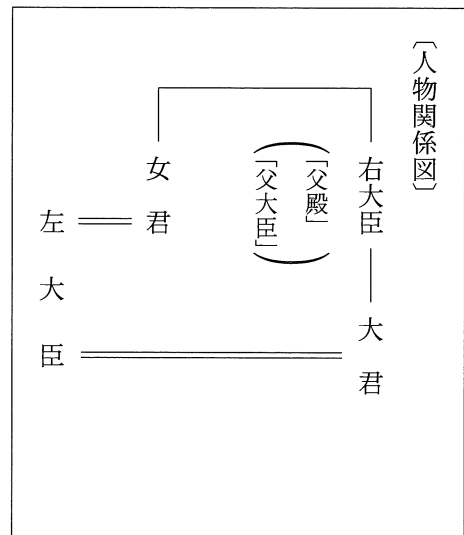
6 薬師の呪——薬師如来の力によって病気を治す呪文。

7 駆り移されぬ——「駆り移す」は、もののけを病人から離して他の人に乗り移らせること。

【文章Ⅱ】 光源氏(本文では「院」)は、病になり生死の境をさまよう妻を救おうとしている。その病には、かつての光源氏の恋人であり、今は亡き女性が関わっていた。

院も、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ。いとあへなく限りなりつらむほどをだにえ見ずなりにけることの悔しく悲しきを」と思しまどへるさま、とまりたまふべきにもあらぬを見たてまつる心地ども、ただ推しはかるべし。いみじき御心のうちを仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらに現れ出で来ぬもののけ、小さき童に移りて呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、うれしくもゆゆしくも思し騒がる。

(注8) いみじく調ぜられて、「人はみな去りね。院」ところの御耳に聞こえむ。おのを、月ごろ、調じわびさせたまふが情けなくつ



らければ、同じくは思し知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身をくだきて思しまどふを見たてまつれば、今こそかくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさで、つひに現れぬること。さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただ、昔見たまひしもののけのさまと見えたり。

(注) 8 調ぜられて——「調ず」は、ここでは祈禱によつて退散させようとする事。

9 昔見たまひしもののけ——このもののけは、以前にも光源氏の前に現れていた。

問
1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

23

25

(ア)

いはけなくより

23

- ④ ③ ② ①
- 他の子よりも
言い表せないほど
幼いころから
かわいらしいので

(イ)

なかなか

24

- ④ ③ ② ①
- 一斉に
たちまち
ひたすら
かえつて

(ウ)

呼ばひのしる

25

- ④ ③ ② ①
- 名前を呼んで祈禱する
大声を出して叫び続ける
泣きながら恋い慕う
近づきながら悪口を言う

問2 波線部 a ～ c の敬語の説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

26

①

a 書き手(作者)から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
b 山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
c 人々から大君への敬意を示す尊敬語である。

②

a 書き手(作者)から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
b 山の座主から大君への敬意を示す尊敬語である。
c 書き手(作者)から大君への敬意を示す謙讓語である。

③

a 書き手(作者)から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
b 山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
c 書き手(作者)から大君への敬意を示す謙讓語である。

④

a 書き手(作者)から左大臣への敬意を示す尊敬語である。
b 山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
c 書き手(作者)から大君への敬意を示す謙讓語である。

⑤

a 書き手(作者)から左大臣への敬意を示す尊敬語である。
b 山の座主から大君への敬意を示す尊敬語である。
c 人々から大君への敬意を示す尊敬語である。

問3

Aさんのクラスでは「文章Ⅰ」を読んだ後、それが「文章Ⅱ」の影響を受けて作られたことを学んだ。次に示すのは、二つの文章の共通点と相違点について、生徒たちがグループ内で話し合っている授業の様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

生徒A——「文章Ⅰ」も「文章Ⅱ」も、もののけとそれに苦しめられている女性が登場しています。他に、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ」という言葉の一致など、表現が共通している点も見られます。

生徒B——そうですね。それに、「小さき童」が登場している点も共通しています。病の原因であるもののけを「小さき童」に移すことで、病人を治療する方法があったようですよ。

生徒C——たしかに多くの共通点がありますね。次に、「文章Ⅰ」と「文章Ⅱ」の相違点についても考えてみましょう。

生徒D——「文章Ⅱ」では、童に移されたもののけが X と言っています。

生徒E——自分の思いを伝えようとしているんですね。では、「文章Ⅰ」のもののけはどのような行動をとっているのでしょうか。

生徒A——もののけは和歌を詠んでいるのではないですか。

生徒B——あれ、この和歌は「目をわづかに見開け」た大君が詠んだものではないのですか。

生徒C——和歌の表現から考えてみませんか。「朝夕こがす胸のうち」や「いづれのかたにしばし晴るけむ」とありますよ。

だから、これは Y と考えられます。

生徒D——なるほど、そのとおりですね。和歌の前後も考え合わせると、「文章Ⅰ」では、Z。

生徒E——「文章Ⅱ」に比べると、「文章Ⅰ」ではもののけをめぐる状況がずいぶん違ってきますね。「文章Ⅰ」は過去の作品を取り入れながらも、独自の場面を作り出したと言えそうです。

(i)

空欄

X

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

27

。

① まわりの者がみな自分を恐れて去ってしまったので、せめて光源氏には反省している気持ちを分かってもらいたくてこうして姿を現したのだ

② 妻のために自分に謝ろうとする光源氏を憎らしく思うのに、それでも光源氏への愛情は昔のままであることを知らせたくてここに來てしまった

③ 光源氏の妻がこのまま死んでしまいそうなほど苦しんでいる様子を間近で見たいので、長年続く恨みの心を持ったままここにやって來たのだ

④ 自分がもののけとなって取りついていることは知られなくなかったのに、光源氏のいたわしい姿を見過ごすことができずに姿を現してしまった

(ii)

空欄

Y

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

28

。

- ① もののけの和歌で、退治される無念を詠んでいて、これ以上の祈禱はやめるよう頼んでいる
- ② もののけの和歌で、激しい嫉妬によるつらさを詠んでいて、それをぶつける先を求めている
- ③ 大君の和歌で、左大臣への愛情を詠んでいて、その思いをもののけに分かせようとしている
- ④ 大君の和歌で、熱にうなされる苦痛を詠んでいて、その原因が明らかになることを望んでいる

(iii)

空欄

Z

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

29。

- ① 大君の顔つきが穏やかになって、右大臣は大君が一命をとりとめたと思っているけれど、左大臣はもののけがまだ取りついていることに気づいていますね。大君はもののけから解放されず、死を覚悟して出家を決意しています
- ② 大君の顔つきが苦しみに満ちたものになって、これほどまでに大君を憎むのは女君の仕業だと左大臣は気づいていますね。大君はもののけから解放されずに亡くなってしまい、右大臣は着物を引きかぶって悲しみに暮れています
- ③ 大君の顔つきが他の人に重なって見えて、右大臣と左大臣はそれが誰なのか怪しんでいるけれど、女君だとは気づいていないですね。大君はもののけから解放されて我に返り、苦しむ姿を皆に見られたくなかったと思っています
- ④ 大君の顔つきがまるで別人のようになって、左大臣は気づいていないけれど、右大臣はその様子がまさしく女君のものだと気づいていますね。大君はもののけから解放された後、正気を取り戻して気恥ずかしそうにしています

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第5問

次の【文章Ⅰ】は、『論語』の一節と、それについて江戸時代の漢学者である皆川淇園（一七三五—一八〇七）が著した注釈であり、【文章Ⅱ】は、淇園の弟子である田中履堂（一七八五—一八三〇）が著した読書論である。これらを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 45）

【文章Ⅰ】

子曰^{ハク}「賜^{（注1）}也^{（ア）}、女^メ以^レ予^ヲ為^ス多^ク学^{ビテ}而^シ識^{シル}之^ヲ者^ト与^{カト}」対^{コトヘテ}曰^{ハク}「然^{（イ）}。非^ト与^ト」曰^{ハク}、

「非也。予^ハ一^{（注2）}以^テ貫^{クト}之^ヲ」

（『論語』による）

夫子^{（注3）}蓋^{ケダシ}常^ニ聞^{クニ}子貢^ノ称^{スル}夫子^ヲ之言^ヲ似^{タリ}為^{スニ}多^ク学^ビ諸^{（注4）}經^ヲ又^{（マタ）}能^ケ強

記^{シテ}識^リ其^ノ文^ヲ因^{リテ}以^テ得^レ成^{スラ}其^ノ德^ヲ者^ト是^ニ故^ニ夫子^{（注5）}擬^{シテ}言^ヲ其^ノ意^ヲ以^テ訊^{タツヌル}之^ヲ

也^{（ハク）}曰^{ハク}「非也。予^ハ一^{以テ}貫^{クト}之^ヲ者^ハ言^{フコト}学問之法、不^レ可^{カラ}貪^{リテ}多^ク務^メ博^ニ、龐^{（注6）}

雑^{ざつ}冗^{ニシテ}乱^{ツテ}反^{クル}聞^ク其^ノ智^ヲ唯^ダ得^テ一^{要道}主^{トスル}之^ヲ」

（皆川淇園『論語繹解』による）

（注） 1 賜——孔子の門人である子貢。賜は名。

2 一以——一つのこと。

3 夫子——先生。ここでは孔子のこと。

4 諸経——『詩経』『書経』といった儒教の古典。

5 擬言——推し量つて言う。

6 龐雑冗乱——雑然としてまとまりがない。

【文章Ⅱ】

淇園先師(注7)每謂(ウ)讀書フ、日ビ讀ミ了をラ數紙ハ、不レ如カ三日ニ知リ得ル數字ニ。此レ

似テ迂ウ回くわいニ還かヘ甚ダ便捷(注8)余因リテ又タ云フ、粗(注9)涉スルハ萬卷ニ、不レ如カ精ニ通スルニ一卷ニ。此レ

似テ狹隘けふ あいニ亦マ實ハ博達ナリト世謂ヒテ多ク讀書ム者ヲ以テ為シ博學ト、輒すなはチ欽きむ羨(注10)之ヲ。不レ

知ニ是レ此多識ニシテ、不レ可カラ謂フ博ト。博者莫所不通達之謂、精スルモ通スルニ一書ニ

亦タ可シ稱ス博學ト。

(田中履堂『學資談』による)

(注) 7 先師——すでに亡くなった先生。

8 便捷——早道である。

9 粗渉——大ざっぱに目を通す。

10 欽羨——敬いあこがれる。

問 1 波線部(ア)～(ウ)のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答

番号は
30
 ～
32。

(ア)
30 「女」
 ④ ③ ② ①
 むすめ あなた だれ かれ

(イ)
31 「非与」
 ④ ③ ② ①
 まちがわれたのですか
 けなされるのですか
 そむくのですか
 ちがうのですか

(ウ)
32 「毎」
 ④ ③ ② ①
 つねづね とりわけ ときおり たまたま

問2

傍線部A「夫子擬言其意以訊之也」について、孔子が子貢の考えを「擬言」して訊ねた理由を筆者はどのように推測しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

33。

- ① 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚えることよりも、人徳の完成を追求しているのだ」と考えているふしが見受けられたから。
- ② 子貢の日頃の言動には、「先生が古典を多く学んでその内容をよく覚えるのは、学者としての名声を獲得するためだ」と考えているふしが見受けられたから。
- ③ 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚えることで、有徳者を心服させたのだ」と考えているふしが見受けられたから。
- ④ 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚え、それによって人格を完成させたのだ」と考えているふしが見受けられたから。

問3 傍線部B「日読_レ了数紙、不_レ如_三日知_一得数字。」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

べ。解答番号は 34。

- ① 漢文の書物を読むうえで、日々数ページの文章を何度も音読するよりも、日々数文字から成る句を確実に覚えていくほうがよい。
- ② 漢文の書物を読むうえで、日々数ページの文章をただ読み通すよりも、日々数文字の漢字の意味や用法を理解していくほうがよい。
- ③ 漢文の書物を読むうえで、日々数文字から成る句を確実に暗記するよりも、日々数ページの長い文章を多読するほうがよい。
- ④ 漢文の書物を読むうえで、日々数文字の漢字の意味や用法を習得するよりも、日々数ページの文章を繰り返し読むほうがよい。

問4 傍線部C「博者莫所不通達之謂」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①

④のうちから一つ選べ。解答番号は35。

① 博者莫_下所_レ不_二通達_一之_謂_上 博は通達せざる所の謂_い莫_く

② 博者莫_レ所_レ不_二通達_一之_謂 博は通達せざる所莫_きの謂_{にして}

③ 博者莫_レ所_レ不_二通達_一之_謂 博は通達の謂_いはざる所莫_く

④ 博者莫_レ所_レ不_二通達_一之_謂 博は通達を之れ謂_はざる所莫_くして

問5 二重傍線部a「又」、b「亦」と同じ意味で用いられている「また」として最も適当なものを、次の①ゝ④のうちから、そ

れぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。a「又」の解答番号は36。b「亦」の解答番号は

37。

① これはまたとない絶好のチャンスだ。

② 校長または教頭が説明に来るはずだ。

③ 勝負では、運もまた実力のうちである。

④ 友であり、そのうえまたライバルである。

問6

「文章Ⅰ」から読み取れる皆川淇園の学問に対する考え方と、「文章Ⅱ」から読み取れる田中履堂の読書に対する考え方を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 38。

① 皆川淇園は、学問では、要点をまず把握し、それに基づいて個別の事例を分析すべきだと説いている。田中履堂は、読書によって多くの具体的な事柄を知って、それら全てを貫通する法則を発見することが大切だと説いている。演繹的に学ぶのか帰納的に学ぶのかという点で、両者の考えは対立している。

② 皆川淇園は、学問では、鍵となる部分を素早く見極めて、それを広く適用して要領よく学ぶべきだと説いている。田中履堂は、一冊の書物を精読することを通じて、学問の土台をじっくりと築くことが大切だと説いている。学びにおいて効率を重視するの可否かという点で、両者の考えは対立している。

③ 皆川淇園は、学問では、精密な分析を通じて、現実の問題に応用できる原理を抽出すべきだと説いている。田中履堂は、現実の問題の解決につながる知識を集積するためには、様々な分野に関係する書物の熟読が大切だと説いている。学びにおける実用性を重んずる点で、両者の考えは通底している。

④ 皆川淇園は、学問では、雑多な知識に惑わされないように、基軸となる要点を把握すべきだと説いている。田中履堂は、多くの書物を乱読するよりも、一冊の書物を隅々まで深く理解することが大切だと説いている。学びにおいて多くの知識を得ることに重きを置かない点で、両者の考えは通底している。